
レディース先生

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レディース先生

【Nコード】

N2551P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

元レディースの矢追朝香先生。時折その経歴を見せる先生がお見合いをすることになり。もとはしまさひで先生や歴代のマガジンのヤンキー漫画を参考にしました。

第一章

レディース先生

矢追朝香先生はというと。その過去は誰でも知っていた。

「元ヤンかあ」

「それで先生だからなあ」

「そんな先生本当にいるなんてな」

「もうびっくり」

皆こう話す。外見は黒髪を奇麗に首の付け根の高さで前から後ろに斜めに切り揃えアーモンドに近い形の切れ眦の目に薄い大きめの唇に奇麗な眉をしている。はつきりと言えば美人である。背は高くすらりとしている。いつもスーツにズボンで決めている。

しかしであつた。先生の過去はあまりにも有名であつた。とにかく昔は凄かつたのである。

「あれでしょ？バイクに乗ってパパラパラって」

「飯島直子みたいだったってね」

「今も車かつとばして学校に来るし」

「怒ると無言で凄い目でガン飛ばしてくるしね」

怒鳴ったりひっぱたいたりはしない。しかしその眼光を突き刺してくるのである。

「滅茶苦茶怖いからね、あれ」

「全く」

「普通に怖いから」

これが先生の評判だった。とにかく怖いのである。

しかしだ。普段は普通の先生である。元ヤンでおまけに鋭い眼光を飛ばし車を飛ばしていてもだ。それでも普段は普通であつた。

だが確かに怖いものはあつた。それで美人でも彼女に声をかける男はいなかった。

「ふられるというかなあ」

「おつかないし」

「近寄り難い雰囲気あるから」

だから誰も声をかけないのだった。

「怖いからなあ」

「下手したら簀巻きにされて海とかな」

「ああ、有り得るよな」

「レディースだからな」

こんなことを言われる先生だった。顔はよく性格も決して悪くはない。元レディースは伊達ではなく気風もいい。だから嫌われる人ではなかった。

だがその雰囲気が悪影響してだ。告白だの声をかけるだのといった話はなかった。先生も気付けば三十を超えていてだ。年齢的に困ったことになるうとしていた。

「あのですね」⁸

その先生にだ。校長先生が声をかけた。

「宜しいでしょうか」

「何をでしょうか」

職員室で声をかけられた。どの学校の職員室でも同じだがこの学校の職員室も灰色の机と色々な本やらファイルやらで埋め尽くされている。そこで声をかけられたのだ。

「今度ですが」

「何かありますか？」

「はい、まずはです」

「はい、まずは」

「落ち着いて話をして下さい」

何か虎を相手にしたような対応であった。

「いいですね」

「はい、今落ち着いてます」

先生も手元にあったペットボトルの烏龍茶を飲みながら応える。
「それで一体何が」

「お見合いですが」

こう切り出した校長先生だった。

「如何でしょうか」

「お見合いですか」

「はい、お見合いです」

また言うのだった。

「それは如何でしょうか」

「お見合いですか」

「お嫌ならいいです」

やはり虎を前にしたようにだ。警戒する感じであった。

「その場合はです」

「まだ何も言っていないんですが」

先生は落ち着いていた。

「全く」

「あつ、そうでしたか」

「そうしたことでは何も言いませんし」

とはいってもであった。警戒はされていた。やはり元ヤンキーだのレディースというのだ。警戒されるものがあつた。今でも眼光が鋭くなったりするのも影響している。

「何もしませんが」

「そうですか」

「はい、それでなのですが」

そして先生の方から言うのだった。先生は自分の席に座り校長先生はその左手に立っている。そのうえで声をかけているのである。

第二章

「お見合いですか」

「どうですか、それで」

「喜んで」

「こう言う先生だった。」

「受けさせてもらいます」

「そうされるんですね」

「はい、それでは場所と時間は」

「後でお話させてもらいます。そうですか、受けられるのですか」

「あのです」

先生の方から。また言ってきた。

「私も生涯独身のつもりはありませんし」

「だからですか」

「そうですね、それはありませんから」

「では。お見合いの時は」

「楽しみにしています」

微笑んでさえた。

「それでは」

「はい、そういうことで」

これで話が決まった。先生はお見合いを受けることになった。

日は休日で場所は名前のあるホテル、オーソドックスなお見合いであつた。そして先生の服もまたオーソドックスに振袖であつた。

その振袖姿を見てだ。校長先生は言った。

「その服ですか」

「何か？」

「いえ、着物ははじめてだと思ひまして」

「だからですか」

「いつもズボンですし」

そしてこのことを言うのであった。

「スーツかと思っただのですが」

「スカートは好きではないですから」

だからそれではないというのである。

「あれはですね」

「あれは？」

「バイクに乗れません」

だからだというのだった。

「ですから」

「それでお嫌なのですか」

「その通りです。振袖も同じですが」

「それでも今は振袖ですよ」

「どうせならと思ひまして。スカートよりは好きなので」

妙なこだわりもここで見せていた。

「ですから」

「それでなのですか」

「では行きましょう」

その赤と鳳凰の模様、何処か赤星十三郎を思わせるその振袖姿でお見合いの場所に向かう。そうしてそのうえで相手と対するのだった。

そのお見合いの相手はだ。これがだ。

見事なスーツを着てそのうえで黒い髪を丁寧に分けている。そのうえで多少濃いがしっかりとした顔立ちを見せている。表情は堅苦しきもあるがそれでいてユーモアもある。背は少し高く筋肉質である。その彼がいた。

先生はその彼の顔を見てだ。ふと足を止めた。校長先生が先生にぶつかってしまった。先生が急に立ち止まってしまったからだ。

「すいません」

「いえ」

「いえ？」

「あつ、はい」

先生はここで我に返ったように言ってきた。

「それで、ですよね」

「はい、それで」

「お見合いですね」

「ですから。ここに來られたのですが」

「はい、それでは」

こうしてお見合いがはじまった。相手のその男はこう名乗ってきた。

「津上賢です」

「津上さんですか」

「はい、郵便局に勤めています」

その職業も話すのだった。

「そこにです」

「郵便局のですか」

「そうです、そこにです」

「私ですが」

今度は先生の方から言った。今二人はちやぶ台を挟んでそれぞれの付添い人と一緒に向かい合っている。部屋は今にも茶道が開かれそうな落ち着いた部屋である。外では実際に竹が岩を打つ音も聞こえてきていた。

第三章

「矢追朝香といいます」

「矢追さんですか」

「はい、高校で教師をしています」

落ち着いた声でその仕事のことも話した。

「国語の」

「国語の先生ですか」

そして趣味はです。

「何ですか？」

「音楽です」

車だのバイクだのはここでは隠した。校長先生にそれは絶対に出すなと前以て釘を刺されていたからである。だからであつた。

「それに読書をです」

「誰の本を読まれますか？」

「三島由紀夫を」

これは実際に読んだことがあるから答えられた。

「他には石川淳を」

「そうした作家がお好きなのですね」

「はい。それで貴方は」

「私はドラマ鑑賞とスポーツです」

相手はそれだというのだった。

「テニスにラグビーが好きです」

「ラグビーがですか」

「球技が好きでして」

相手はこう話す。

「ですから」

「それで球技なのですか」

「野球も好きです」

このことも話してきた。

「中日が」

「私もです」

先生の今の言葉は条件反射だった。

「私も中日は」

「ファンですか」

「はい、昔から中日ファンです」

「そうだったのですか」

「母が名古屋出身で」

聞かれる前の言葉だった。

「その縁で」

「成程、それで」

「高木守道さんのファンでした」

「私は矢沢健一さんです」

二人共何気に古い選手を出す。

「ドラゴンスはやはりこの二人があつてこそですね」

「そう思います。星野監督もいいのですが」

「阪神に行かれましたし」

「残念でした」

「ふむ、野球の話で盛り上がってますね」

校長先生はその状況を見逃さなかった。ここは年の功だった。

「それでは」

「はい」

向こう側もだ。校長先生の言葉に頷いた。

「後は若い人に任せて」

「年寄りはこちらで」

こうして先生とその津上という郵便局員だけになった。二人はオースドックスにホテルの庭も歩いてである。そのうえで話をするのだった。

「まさか同じチームのファンだったなんて」

「奇遇ですね」

「全くです」

こう話しながら二人で話していた。

「それは」

「しかし。ドラゴンズも今年は」

「はい、全くです」

二人の顔がここで曇った。

「憎むべき巨人に先をいかれて」

「無念ですね」

「巨人を倒してこそですから」

先生はむっとした顔で言った。

「本当に」

「その通りです。まずは巨人です」

津上も厳しい顔になっている。

「絶対にです」

「巨人を破ってこそ」

また言う先生だった。

第四章

「そうじゃないと車に乗っても今一つ」

「車!？」

車と聞いてだ。ふと津上の顔色が変わった。目の光がだ。

「車といますと」

「あつ、それは」

言われてだった。自分の失言に気付いてしまった。それからだった。だが言ってしまったことは戻らない。それはどうしてもである。それに戸惑っているのだ。津上が言ってきた。

「車でしたら」

「はい」

「僕も好きですよ」

にこりと笑つての言葉だった。

「それもかなり」

「お好きなんですか」

「それとバイクも」

そちらもだというのだ。

「バイクもです」

「バイクもですか」

「はい、実はですね」

そしてまた言う彼だった。

「昔から好きで。実家がバイク屋で」

「そうだったんですか」

「バイクはカワサキです」

「いいですね、カワサキは」

先生もカワサキの名前に笑顔になる。実は高校の時からバイクはずっとそれである。それに乗って夜の街をかつとばしていたのである。

「やっぱり」

「そうそう、仮面ライダーになった気分になれますし」
「仮面ライダーですか」

「そう、いつもお客さんに言われてます」

実家のそのバイク屋のお客ということだった。

「仮面ライダーみたいだって」

「お客さんにですか」

「子供の頃から言われてまして。それで気付いたら」

「自分でも乗られたんですね」

「今もです」

こう先生に笑顔で答える。

「やっぱりカワサキが一番格好いいですよ」

「ハーレーがロマンだって言う人もいますね」

「ええ、ハーレーも扱ってます」

津上はそれもだという。

「けれどあれは」

「好きではないですか？」

「好きですけど乗るまでが大変ですからね」

「高いですね」

「そう、だからロマンです」

そのロマンの為に金を使う。まさにハーレーの為にだ。ハーレーを愛する者はその為には金なぞ惜しむことはないのである。しかも全くだ。

「カワサキはそれとは違いますね」

「ヒーローですよ」

「はい、本当に。ただ」

「ただ？」

「ホンダのワルキューレも嫌いじゃないです」

今度はホンダであった。

「あれも」

「ワルキューレですか」

「あれはどうでしょうか」

「はい、あれもいいですね」

目をきらきらとさせての言葉だった。先生は自然とそうになっていた。

「あのデザインが。かなり」

「いいですね」

「カワサキもいいですがホンダもかなり」

そんな話をしてだった。二人はすぐに意気投合した。すると先生はだ。車での登校からだ。バイクになったのであった。そのカワサキである。

バイクをかつとばし学校に来る先生をだ。生徒達は驚いた顔で見ている。

そしてだ。そのうえで言うのだった。

「何かあったみたいだよな」

「ああ、車止めたのかね」

「どうなんだろうな」

「車にも乗るわよ」

先生の言葉だ。

第五章

「ただ。今はね」

「バイクですか」

「それに凝ってるんですか」

「そうよ。今はバイクよ」

楽しげな笑みを浮かべて言った。

「今日もかつとばすわよ」

「今日もか」

「そうするんですね」

「相手もいるし」

そしてだ。このことも言うのだった。

「相手もね」

「相手って？」

「誰ですか、それ」

「ライバル登場ですか？」

「そういうところね」

笑みはそのままである。楽しげなもののみまだ。

「だから今はバイクよ」

「先生らしいですね」

「全く」

「その辺りは」

皆それを聞いてだ。納得した顔で頷く。

「とてもよく」

「何ていいますか」

「何てって？」

先生はそれを聞いてだ。その眼光を鋭くさせていた。

「何が言いたいのかしら」

「いえ、何もありません」

「何もないですから」

「気にしないで下さい」

生徒達は皆その眼光に負けてしまった。やはり強い。

「けれど。張り合いが出てるんですよ」

「それってかなり」

「いいことなんじゃ」

「そうよ。今毎日が充実してるわ」

笑顔にだ。それが実際に出ていた。

「バイクで風を切るのも。楽しいものよ」

「まあ頑張ってください」

「そういうことで」

「さて、と」

先生は生徒達の言葉を受けながらだ。そのうえで言う。

「行くわよ、またね」

こうしてまたバイクに乗って津上とかけ飛ばすのだった。それはもう若かった時と同じであった。完全にヤンキーだのレディースだのの時だった。

そしてその中でだ。先生の顔はさらに生き生きとしてきてだ。そのうえで津上と一緒にいた。この日も二人で夜の道を走っていた。

それが終わった夜のファミリールストランでコーヒーを飲みながら。津上は言ってきた。

「実はさ」

「どうしたの？」

「俺昔は街道レーサーだったんだ」

「このことを話すのだった。

「実はね」

「そうでしょうね」

それをわかっていたかの様に返す。

「そんな感じね」

「あつ、わかるんだ」

「わかるわよ。その走り方でね」

そこから指摘した先生だった。

「大体のことは」

「それでそつちはあれか」

「わかるのね」

「わかるさ、レディースだよな」

津上からの言葉だ。向かい合って座る窓際の席で話をしている。

「そつちだろ」

「やっぱりわかるの」

「何となくだけれどな」

それでもわかるというのである。

「その走り方でね」

「成程、それでなのね」

「わかるさ。しかしそれでもな」

「それでも？」

「いいものだよな」

津上はコーヒーを右手に笑顔で述べた。

第六章

「やっぱりな」

「いいって何が」

「こうして走れるってことがさ」

言うのはこのことだった。それを話すのである。

「一緒にさ」

「一緒に」

「だからさ」

また言う彼だった。

「よかつたらだけれど」

「ええ、よかつたら」

「これからも一緒にどうか」

こう言うのである。

「ずっと一緒に。一緒に走らないか？」

「一緒にね」

「そっちがよかつたらだけれど。どうか」

こう話してだった。そしてまた言った言葉は。

「一緒にさ」

「少し考えさせて」

先生は即答は避けた。その言葉の意味がわかっているからだ。だからこそ即答を避けてそのうで言葉を返したのである。そうだったのだ。

「少しね」

「そうか。それじゃあ待ってるからさ」

「返答は絶対にするから」

「待ってるからさ」

こんな話をしてだった。数日経った。先生はその間ずっと無口だった。その無口な理由は考えていたからだ。津上の言葉への返答を

考えてだ。

それで数日過ごした。考え続けてだ。出した結論はだ。

「私らしくね」

まずはこう一人で言った。

「私らしく。やるしかないわね」

こうしてそのうえでだ。津上に連絡をした。その日は週末だった。夜の街道レーサー達がよく使う山道においてだ。そこで話をするのだった。

左手にはカーブが連なる山道があり右手には白いガレージと海がある。海の上には黄色い満月がある。濃紫の夜がかなり美しい。

そこでだ。先生は津上に対して言う。二人はそれぞれライダーズ
ーツを着ている。

「決めたわ」

「決めたか」

「ええ、私らしく決めるわ」

こう津上に言うのである。

「私らしくね」

「らしくか」

「走りましょう」

津上にまた告げた。

「まずはね」

「走るか」

「ええ、走って」

最初はそれだというのだ。

「それから決めたいのよ」

「確かにらしいね」

それを聞いてだ。笑顔で言う津上だった。

「それは」

「らしいのね」

「じゃあ気が済むまで走って決めるか」

津上は笑顔で先生に告げた。

「今から。そうするんだろ？」

「そうよ。走ってそれで決めるわ」

先生はこう言ってヘルメットを被った。津上もだ。

手で合図をしてそのうえでだ。それぞれバイクに乗る。

それから二人で走った。夜の街道を朝まで気が済むまで走った。

そのうえで出した答えはだ。

「いや、上手くいったよ」

「そうですね、本当に」

「本当に上手くいったよ」

校長先生は校長室で笑顔でだ。教頭先生に話していた。教頭先生は小柄で頭の禿げた人だった。その教頭先生に対して話すのだった。実にね」

「矢追先生も遂に結婚ですね」

「うん、何でもね」

「何でも？」

「御主人は郵便局員でね」

「このことも話す。」

「それで元街道レーサーらしいんだ」

「街道レーサーですか」

「矢追先生はレディースで」

「バイクとバイクですか」

「そう、それに車もあつて」

「その二つだというのだ。」

「その縁でね」

「縁ですね、それもまた」

「よかったよ、とにかく」

校長先生はまた言った。

「幸せになれてね」

「そうですね。今矢追先生は幸せですし」

「毎日バイクで仲良く走ってるそうだよ」

「それはまた」

「何か面白い話だけれどね。夫婦でバイクで走って」

「はい」

「いいことだよ」

校長先生は笑顔になっている。それを心から喜んでいる顔だった。そうしてだ。校長先生はまた言った。

「それじゃあ」

「はい、それじゃあ」

「結婚式の準備をするか」

「今度言った言葉はこれだった。」

「今から。そうしようか」

「式場も参列者も」

「全て決めて。そうするか」

「ええ」

「こんな話をするのだった。そしてだ。」

先生は白いウェディングドレスで式にいた。その満面の笑顔のままだ。式が終わると二人でバイクで新婚旅行に出た。それが先生の幸せであった。

レディース先生 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551p/>

レディース先生

2010年12月1日21時10分発行